

大学生の前方照応代名詞の使い分けについて

——中学校英語教科書の英文を用いた調査と考察——

山 本 和 之
大 谷 美 奈 子
徳 永 和 子

1. 序

本稿の目的は、中学校英語教科書の英文を用いて大学生に実施した、前方照応代名詞の使用に関する調査の結果を考察し、代名詞習得期である英語学習の初期段階の英語教育に、大学からの情報の提供と提言を行おうとするものである。調査内容は、学生が英文を発信する際に、前方照応の英語代名詞に関してどのような問題点を抱えているかを見るもので、英文を日本語に移し替える際の代名詞処理の問題は別途調査を行う予定である。

通常の教育課程による英語学習は、日本語（母語）の習得後に始まる。すでに習得している日本語の直示表現（ダイクシス）「これ」「それ」「あれ」が、それらの対応物を求める形で、英語の this, it, that の習得に影響を与えることは、英語教育に携わる者であれば、誰でも経験している。その点を考慮し、調査で選んだ前方照応代名詞は指示代名詞の this, that と人称代名詞の it である。

これら前方照応代名詞の用法に関する記述は、Lakoff (1974), Lyons (1977), Tanz (1980), 村田 (1982)、安藤・山田 (1995)、最近でも Parrott (2000), Strauss (2002), Huddleston & Pullum (2002), Swan (2005), Carter & McCarthy (2006) 等、また日本人学生と母語話者とを比較した Niimura & Hayashi (2008) 等、すでにいくつか行われている。その中で本調査を実施しようとしたのは、大学生の英語の代名詞習得状況を中学校英語教科書の例文を用いて調査し、その情報を提供することによって、中学校の英語教育の改善に大学側から寄与したいからである。もう一つ、当然のことながら、調査実施校における英語教育の改善に即役立てたいからである。

代名詞表現は母語獲得の早い段階で獲得され、固定化される。¹ 普通の語彙と違って、その成員が逐次増えていくということはない。外国語学習においても同様で、中学校英語の早い段階で提示され、一旦学習してしまうと、高校や大学の段階で再度学び直したりすることはあまりな

い。そのため、英語学習初期の段階で習得した英語代名詞表現が、その使い方に関して誤った、あるいは不完全な知識のまま、学習者の中間言語の中で化石化してしまい、それ以降も訂正されないまま居残ってしまう恐れが多分にあると思われる。自分の経験からしても、中学で学習以来、使われている代名詞について、この代名詞は何を受けるか、何を表すか、といった問（受験英語の定番の一つ）や、英語代名詞の訳し方について指摘を受けることはあったが、自分が情報を発信する場合にどの代名詞をどのように使うかについて、教えられた記憶はない。就中、英語の代名詞使用における心理的距離や情報の新旧の重要性については、先生から説明を受けたことはなかったように思う。

本調査に使用した用例は、山口県で採用されている中学校英語教科書の中から、*New Crown*, *New Horizon*, *Sunshine* の3種類（各1、2、3年用）を選び、教科書の英文をそのまま利用した。調査の被験者として協力してくれたのは、英語系専門科目（平成20年度前期の1科目）の受講生（3年・4年）39名である。同じ調査を、英語とは関係ない学科の授業で実施したならば、結果はさらに悪くなると思われる。

この調査は、発信者として、前方照応環境において3つの代名詞（it, that, this）のうちどれを使用するかを見ようとするものであるから、本当は選択問題ではなく代名詞を直接記入させる方がよかったかもしれない。しかし大体の傾向は掴めると思う。問題は全部で29題作成したが、本稿では、そのうち教科書で使われている代名詞と同じ代名詞を選んだ学生数が6割を切った文を中心に考察を行った。6割という目安に大きな意味があるわけではないが、半分近くの学生が教科書とは異なる代名詞を選んだ文は、代名詞習得上の問題点を含んだ文と考えたまでである。考察対象となった文は、内容的には、日本人学生の直示（指示代名詞）への依存性の強さを示すものと、it, that, thisの使い分けにおける心理的要因への対応の難しさを示すものとの二つに分かれる結果となった。

なお提示した例文で、使用可能な代名詞は、教科書で示されている代名詞だけとは限らない。代名詞の選択には心理的要因が働くので、同じコンテキストでも、心理的文脈の受け取り方が違えば、あるいは空間的距離と心理的距離のどちらを重要視するかの違いによって、異なる代名詞を選択することも可能になる。² したがって、三つから一つだけ選ぶというやり方よりも、どの代名詞を使うかを、複数選択も可で問うた方が適切であったかも知れない。あえてそうしなかったのは、複数選択にすると、よく分からないままに適当に丸をつけてしまうのではないかという心配があったのと、心理的要因も含めて、教科書の代名詞使用と学生の代名詞使用がどのようにずれているかを知りたかったからである。

調査の対象とした英文では、括弧内には、その中から選択する代名詞が入れてあったが、本稿では空欄にしておき、その下に何%の選択を得たかの数値を付して代名詞を提示しておいた。下線を付した代名詞が教科書で使用されている代名詞である。なお、回答に際して、回答を飛ばし

てしまった学生もいるので、選択数は実際の回答数ではなく、パーセントで示すことにした。100%を超える数値があるのは四捨五入のためである。以下、最初に調査結果を示し、そのあとに考察を行うことにする。対話例で、対話者の名前はすべて A, B で示したことをお断りしておく。スペース節約のためである。

2. 前出の語句・事柄を受ける it

(1) A: Oh, what's that on the desk? B: () *origami*.

(It's 54 % / That's 44% / This is 3%)

(2) A: What's that net over there? B: () a dream catcher.

(It's 25% / That's 55% / This is 20%)

(3) I finished writing this Christmas poem a few days ago. Can you write music for () ?

(it 25% / that 20% / this 55%)

(4) Good afternoon, everyone. My name is James Chen. I'm from Singapore.

() a beautiful country.

(It's 74% / That's 13% / This is 13%)

(5) A: What do you study in Japan? B: I study computer science.

A: Computer science! Is () difficult?

(it 71% / that 24% / this 5%)

(6) A: This is a photo of my sister. B: Oh. What's she wearing?

A: A sari. B: () beautiful.

(It's 68% / That's 25% / This is 8%)

日本語は、既出要素で言わなくても分かるものは、明示する必要はない（ゼロ代名詞を使用できる）。他方英語では、たとえ言わなくても分かる場合でも、文法上必須の要素はその場所を空にしておけないので、その場所を埋める何らかの形を必要とする。その際、既出の名詞句で埋められるのであったら、それが指す対象物がまわりにある場合でも、that や this を使わず、再述形の it を使用するのが基本である（但し指示代名詞の that や this が使えないという意味ではない）。³ 中学英語教科書でも、「疑問文では、is が this や that の前に出る。答えの文では it を使う。」と解説し（*New Horizon 1*, p. 16）、it で受ける練習を行っている。it で受ける練習は他の教科書でも十分に行われている。しかし実際には、例（1）～（3）で、教科書の it と違って指示代名詞の that, this を選んだ学生が意外と多い。これは、代用形 it の使い方が定

着しておらず、指示代名詞が使える環境では、そちらを使おうとするためであろう。指示代名詞を使おうとするのは、日本語からの影響があると思われる。(1)や(2)に対応する日本語文で一番自然なのは、「折り紙(です)」のようにゼロ代名詞の使用であるが、もし代名詞を使って表そうとすれば、指示代名詞の「あれ」(または「これ」)を使うよりほかに手立てはない(「それ」が使える場面ではない)。これが英語の代名詞選択に影響をあたえると、再述形 *it* よりも、指示代名詞 *that, this* を選ぶことになると思われるからである。なお調査結果で、(1)よりも(2)の方が *that* の使用者が多いのは、指されているものが *that net over there* と具体的に述べられている分だけ、指示代名詞への指向が強くなっているためであろう。この(1)～(3)に対して(4)～(6)では、*it* を選ぶ学生がずっと多くなっている。(4)～(6)では、(1)～(3)と違って、代名詞が前方照応として機能することがはっきりしている(このような場合の *it, that, this* の使いわけは次節で扱う)。要するに、(1)～(3)のような直示できるものが存在する場合に、そちらに引っ張られた代名詞の使い方をするわけである。英語でも、(1)のような応答文で、答える側も折り紙を見ながら、それを *that* で指して答えることは可能であるが、それより前に前方照応の *it* で答える選択の方が基本であることを、英語導入期だけでなくその後においてもたえず生徒に刷り込んでおく必要がある。中学校英語教科書の *it* の語句説明(巻末)では、「前に出たものを受けて」(*New Horizon 1*)、「前に出てきた物をさして」(*Sunshine 1*)、「前に出てきたことばやもの・ことがらをさし」(*New Crown 1*)といった用法解説を与えているが、もう一步前進させて、語句説明を「すでに述べられているものを再度言わなければならないときに使う簡略形」のような、どういうときに *it* を使うかという観点から述べたものに変更したらいかがであろうか。従来の「前に出たものを受けて」とか「前に出てきた物をさして」という説明は、使われている *it* が何を表しているか、何を指しているかを述べていて、解釈的である。それと、もうひとつ、語句説明のところで、いずれの教科書も「それ」(*New Horizon*)、「それ」(*Sunshine*)、「それ、これ、あれ」(*New Crown*)という訳語を当てている。しかし「それ」という訳語を与えると、それがひとり歩きしてしまい、*it* が日本語の「それ」と同じ働きをするような印象を与えてしまう。むしろ「それ」という訳語は与えずに *it* の刷り込みを行ってはどうか。必要なのは、使われている *it* の語義が分かることではなく、*it* が適切に使えることである。もし対応する日本語を与えるなら、ゼロ代名詞への言及も含めた方が誤解を生じないと思う(浅野(2008)は「日本語に訳さないことも多い」と注意している)。なお、子ども向けの英和辞典『キッズクラウン』でも *it* には「それは(が)、それに(を)」という訳語を掲げ、「What's this? これ何? — It's a mole. モグラです。You're it. 君が鬼だよ。(ゲームの時に言う)」という例文が挙げられている。「それ」という日本語訳を与えながら、例文(*It's a mole.* 「モグラです」)では、「それ」が使われずにゼロ形である。これだと、*it* が実際の用法と切り離されて「それ」と結びついてしまい、*it* = 「それ」という図式がひ

とり歩きするのではなかろうか。そしてこの結びつきが強くなればなるほど、すでに言及されお互い分かっている事がらを強調なして述べるという *it* の基本的用法との結びつきが弱められるように思う。

3. 前方照応用法の *it*, *that*, *this* の使い分け：心理的距離

前方照応の *it*, *that*, *this* の使い分けははっきりしているわけではない。これまでに提案されているものも含めて大きな指標で言えば、(A) 名詞句を受けるときは *it* が基本形（デフォルト形）で、節・文を受けるときは *that*, *this* が多い。(B) *this* は話者領域（心理的距離を含めて話者との関連が深い領域）の要素、*that* は他者領域（自分から離れている、あるいは他者との関係の方が深いと感じる領域）の要素を受ける場合が多い。両者可能な場合は *that* の方が無標の形で、特に *this* を使う理由がなければ *that* を使う。本稿で行った話者領域、他者領域という区別は、かなり広範囲の現象を含む区別である。話者領域・他者領域の一番簡単な例を挙げれば、同一話者が自分の考えを述べている発話は話者領域であるが、話者が変わると他者領域になる。⁴ Tanz (1980:73) から例を挙げると（もともとは Lakoff (1974) の例）、<Speaker A: Dick says that the Republicans may have credibility problems. Speaker B: *This / That is an understatement.> において *this* が使えないのは、他者領域の要素を指すからである。話者の交代がなければ *this* も可能になる。Parrott (2000:321) の言う ‘ownership’（例 *This is all I can suggest.*）もここに含まれる。(C) *it* はすでに話題として確立したものを受け、感情的に無色で中立的であるのに対して、何らかの感情や強調を伴うときは *this*, *that* が起きやすい（心理的意味を持つ）。*that* は *it* の強調形とも言える。したがって、先行文に受けるもの（再述するもの）が二つあれば、文の主題のような旧情報は *it* で受け、焦点化される文末要素（新規に導入され強調される要素）は *that*, *this* で再述される。これは英語の旧情報－新情報という流れに沿ったもので特別なものではない。(D) *this* と *that* では、*this* の方が感情の度合い、対象との心理的密着性が強い。ある対象に対して心理的かかわりが強いというのは、心理的距離が近い（自分のもの（話者領域））として受け止めるということであり、当然 *this* の使用を促すことになる。他方嫌なことを受ける場合は心理的距離が遠くなり、他者領域となるので、*that* の使用を促すことになる。その意味では (D) は (B) と関連した指標であり、感情的要因を取り出して述べたものである。(E) 新しい話題、重要な話題として取り上げ、それについてさらに述べたい場合（話をさらに展開したい場合）は *that* より *this* が好まれる。⁵ 重要な話題として取り上げるということは、心理的密着性が強いということであり、(D) と関係した指標である。(F) 学術論文では、すぐ前の文（に書かれていること）を指すのに *this* が多用されるが、これはとくに強調や感情を表しているわけではなく、空間的遠近用法の *this* がそのまま

持ちこまれたものと考えることができる。なお (B)、(C)、(D) の心理的遠近は、空間的直示用法の遠 (that) ・近 (this) からの写像であるが、これは前方照応のときだけでなく、空間的直示用法の this, that にすでに見られる現象である。心理的遠近が空間的遠近に優先する例を Huddleston & Pullum (2002:1505) より挙げておく： <手に何か持っているとき、What is this? が基本形であるが、心理的拒絶反応がある（心理的に遠ざけたい）ときは、What is that? とも言える。また、ジャケットを買いにデパートに行き、すぐそばのジャケットを指して、How about this one? と言うと、自分の買いたいものになるが、How about that one? と言うと、他の人の買いたい物になる。> 両者の例とも、同じ対象物が指示され空間的遠近の差はないが、心理的距離に違いが出ているわけである。本稿で使った区別で言えば、this は話者領域のもの、that は他者領域のものを指していると言える。it は特に強調が置かれていない場合に使われるので、あまり心理的距離とはかかわりを持たない。前節の、名詞句を受ける(4) のような用例や、文を受ける次のような例（教科書例）でも、とくに話者の感情の強まりはない：<This is a picture of our Volunteer Day. We clean the town on Volunteer Day. It's not easy, but it's fun.> 以下教科書の代名詞と学生の選択した代名詞とのずれが大きかった前方照応の this, that について、調査結果を見ながら考察を進める。

- (7) Everyone, look at this picture. This is a bonobo. His name is Kanzi. How old is he? He's about thirty years old. He lives with an American scientist. He learned many things from her. Now he knows a lot of English words. So he can communicate with her. () is really great. (It 44% / That 31% / This 26%)
- (8) Sudan is a large country in northeast Africa. It is a country with great promise. But it also has great problems. In 1993 the people of Sudan suffered from war and hunger. Few people knew about (). (it 44% / that 33% / this 23%)
- (9) A: Well, the bomb exploded over it. The heat reached 7,000 degrees centigrade. About 130,000 people were killed.
B: 130,000 people! () makes me sad. We must never forget ().
(It 65% / That 33% / This 3%) (it 65% / that 22% / this 14%)
- (10) A: I finished writing this Christmas poem a few days ago. Can you write music for (= (3))? We can sing it with a guitar.
B: A guitar in church? Can we do ()?
(it 28% / that 65% / this 8%)

(7)、(8) では、教科書と同じ this を選んだ学生が一番少ない。(7)、(8) は両者とも生

徒が発表している文である。他人との発話の交代もないし、中にはほかの人の言葉も引用していない。全体が話者領域に属する文で、話者は自分の領域の中から、先行する特定の事柄を取り上げ、すごいこと、知らないこととして強調しているのである。自分の関心事（身近なもの）として選んだ事柄は、更なる話へと展開することが多い。this はこのような心理的に近い事柄を指す場合に使われるが、学生にはこのような心理的距離に基づく使い分けはあまり身に付いていないように思う。普通の教室での経験からしても、学生がそのような使い分けを承知の上で代名詞を選択したようには思えないのである。実際のところ、心理的距離が英語の指示代名詞の使用に重要な役割を担っていることをもともとあまり学習していないのではないだろうか。中学校の英語教科書に心理的距離を反映した前方照応の代名詞は出ているが、心理的距離についてはあまり気にしたことがなかったというのが実情ではないだろうか。したがって、日本人学生がそのような心理的遠近の読み取りを避けて、とっさに無色の再述形 it を選んでしまうというのは、けだし頷ける結果である。(7)、(8) で、this よりも that を選んだ学生の方が多かったのは、前出の語句を指す代名詞としては、これまでの学習経験から、this よりも that の方が多い (that の方が馴染みがある)、ということに起因しているように思う。既出の事がらを指す that は、That's right. のような文で、中学入学後すぐに学習する。なお、(7) を載せている教科書 (*Sunshine 1*) では、このような this についての説明は、1～3 年用を通じて、巻末の this のところに載せていない。他方、that については、1 年用の教科書から「前に出た事柄をさして」という説明を与えている。上掲 (8) を載せている教科書 (*New Crown 3*) は、1 年用から this に「前に出た、またはこれから言うことば・ことがらをさして」という説明を付しているが、後方照応の部分（「またはこれから言う」）を除くと、that の説明「前に出てきたことば・ことがらをさして」と同じで、どのようなときにどちらを使うのかまでは述べていない。その部分は教師の裁量にまかされているのであろうが、おそらく生徒はその後前方照応の it, that, this の違いについて教えられることもなく現在に至っているであろう。

次に教科書例 (9) を見ていただきたい。(9B) は、B の話者領域の中に、A の発話 (130,000 people) が引用されて入り込んでいる例である。従って括弧の代名詞は他者領域の要素を受けることになるので、代名詞は that が使われている。感情的にも、好ましくない事態なので、その点でも心理的距離は遠い。しかし、A の発話も一旦 B の話者領域に導入されると、B の話者領域の一要素として捉え直され、自分の発話の一部として this で受けることができる。それが (9B) の二番目の例である。学生の選択も最初の例より this が増えている。

次に (10B) の括弧を見ていただきたい。(10B) の例は、他者の発話（他者領域の語句）に対してびっくりしている場面である。ここでは教科書と同じく、心理的に有色の that を選んだ学生が一番多い。これに対して、(9B) の二番目の括弧では教科書と違って無色の it を選んだ学生が一番多かった。これはおそらく、(10B) は疑問文となっており、「そんなことできるの？」と

驚いている（強く疑っている）文であるのに対して、(9B)の文は平叙文で、感情を述べてはいないが、感情の表出は(10B)より少ない。学生にとっては、同じ前方照応でも、(9B)の方が(10B)よりも無色のitと結びつきやすかったと思われる。

次の例も、話者領域の中で既出の文を受けるthisの教科書例であるが、thisを選んだ学生は少数派である。

(11) A: Why are forests disappearing?

B: Because people cut down the forests for wood and for farms.

A: I see. They can get land and food. () is good for the people.

(It 64% / That 26% / This 10%)

(11)ではitが最多であるが、次の(12)のように、thatかthisかのどちらかしか選べない場合はどうなるであろうか。

(12) We went to Kyoto on a school trip in June. Kyoto is an old city with many traditional buildings. My favorite was Kinkaku-ji. It was very beautiful. I also enjoyed talking with my friends at night. I'll never forget () trip.

(that 30% / this 70%)

この例では、心理的近接性を感じさせるthisの方を学生は選んでおり、教科書例と7割の学生が一致している。School tripを思い出してその中に身を入れて話しているところなので、もしここでthatを使ったならば、なにかschool tripを遠くに離れた存在として見ているような感じになる。itを選択する余地のないところでは、thisとthatの感じをそれなりに捉えているようだ。

上記(9B)の最初の括弧は、話者領域の中に他者領域(引用句)が含まれていて、それをthatで受ける例であるが、次の例は、同じ話者領域の中の先行する事からをthatで受けている例である。

(13) I'll never forget the school trip. () was a happy, happy trip!

(It 73% / That 28% / This 0%)

(12)の例と対照して見ていただきたい。(13)は、現在の自分から過去の楽しかった修学旅行を振り返っている文である。過ぎ去った出来事は心理的に遠い。他者領域である。同じ過去の修

学旅行でも(12)の場合は、過去の修学旅行の中に自分自身(話者)を投入しており、そこで見たものや出来事を述べている。その意味では話者と修学旅行が一体となっていて、過去の修学旅行も心理的に同一の話者領域である。その違いは学生にも理解でき、他者領域の(13)で *this* を選んだ者は皆無であった。教科書との隔たりは、やはり、無色の *it* を選んだ学生が圧倒的に多いことである。既出の事がらを受ける *it*, *that*, *this* の使い分けは母語話者にもはっきりしているわけではない。⁶ 日本人学生が、心理的遠近を避けて、中立的な *it* を使おうとするには、当然と言えば当然の傾向であろう。

学習英和辞典でも、前方照応の *it*, *that*, *this* の区別はあまり体系的には述べられていない。辞書としての性格上これは致し方ない。それぞれの辞典に断片的ではあるが学習者に役立つ情報が載せられている。浅野(2008)では、*that* の指示形容詞用法のところ、*that* と過去や非難・軽蔑との親近性が述べられている。しかし前方照応における三者の使い分けまでは分からない。田中他(2005)は前方照応の *this* のところで、<◆ *this* には、話題となっている事柄についてさらに情報を提供したい場合に好んで用いられる>と注記している。これも違いの一部であって、全体像は見えてこない。なお、同辞典の *that* の語法のところでは、後方照応は *this* のみ可能であるが、前方照応では両方が可能としてその例 (*I recommended him for the job, but that [this] was a big mistake.*) を載せているが、両方で意味上どうい違いがあるのかは(あるいはほとんど違いがないのかは)触れてない。中村・田辺(2001)は、*it* の項で、<話しことばでの *it*, *this*, *that*>という語法欄を設け、*it* は会話の話題に次々に説明を加えていくのに用いる、*this* は新たな話題を提示して、会話の焦点をそちらに全面的に移すのに用いる、*that* はいままで話題にしたことを遠ざけ、ほかの話題に移るシグナルに用いる、と述べている。但し挙げられている *this* の例文は後方照応の例であり、また *that* の話題転換の例 (*That's all right.*) も、*that* の前方照応用法の一部なので、これで前方照応における *this* と *that* の使い分けが分かる、というわけにはいかない。なお同辞典で、すでに述べたことを指す *this* の例 (*She wrote another novel, and this also achieved remarkable success.*) には、<この場合 *that* も可>と注記しているが、どのような違いがあるかは分からない。但しこの辞書は最初の語義のところ、*that*, *this* の空間的心理的距離に触れているので、これを手がかりにすることは可能である。

実際のところ、この三者の相違をどの段階で習得させるかは難しいところがある。文法的に正しいか間違っているかという問題ではないので、指導がむずかしい。中学生段階ではあまり細かい区別は英語の習得を遅らせることになるので、あとの段階に先送りする方が得策かもしれない。しかし、この三者が前方照応の代名詞として中学教科書で実際に使われている以上、また言語コミュニケーションにおける代名詞の重要性と英語代名詞の使用に際しての心理的要因の大切さを考えると、やはり中学段階で一通りの指導は必要と思われる。英語教科書の巻末の語句解説

に、やはり話者との心理的遠近、感情的遠近を取り入れた説明が必要のように思う。少なくとも、前方照応の英語代名詞の使用に、そのような要因がかかわっていることを意識しておく必要がある。

4. 成句として覚える that 文

すでに触れたように、既出の発話（文）やその内容を指す that の用法は、中学 1 年から学習する項目である。(14)～(16) は中学 1 年の教科書からの例であるが、that が使われている教科書例の特徴を知るために、2、3 年教科書からも代表的な例を挙げておく。(16)、(17)、(19)、(20) は調査に使用した文である。なお、下線は現筆者の付したものである。

(14) A: Don't pick the flower. Take a picture.

B: I see. We live with nature.

A: That's right.

(15) A: Oh, Kumi. I'm late. Sorry.

B: That's OK.

(16) A: How many sleeping bags do you have?

B: I have two.

A: OK. We have four in all. () enough.

(It's 31% / That's 63% / This is 5%)

(17) A: I visited my uncle last year. He's in the rodeo every year.

B: () wonderful.

(It's 29% / That's 59% / This is 3%)

(18) A: Last Saturday I went to a forest near my house. I walked through it. I had a very good time.

B: That's good. You know, the National Trust in Japan protects that forest.

(19) A: I visited my uncle in Okinawa. I snorkeled with my cousin.

B: () nice. Did you see many beautiful fish?

(It's 26% / That's 74% / This is 0%)

(20) A: I'm sorry to be late.

B: () OK. Is anything wrong with you? (It's 44% / That's 56% / This is 0%)

A: No, nothing is wrong with me. The train was ten minutes late.

B: Oh, () too bad. Now let's begin. (It's 3% / That's 97% / This is 0%)

- (21) A: Guess what! Next month I'm going to visit Sydney as an exchange student.
 B: Oh, are you? You're lucky. How long are you going to be away?
 A: For two weeks. I'm going to stay with a host family.
 B: That's great! You can talk with them in English every day.
- (22) A: Why don't we watch a video Saturday afternoon?
 B: That's a good idea.
- (23) "We only fall and die. Why are we here?" Freddie asked again. Daniel said,
 "For the friends, the sun and the shade. Remember the breeze, the people and
 the colors in fall. Isn't that enough?"

教科書で導入されているこの種の that 例は、[1] 文が短く覚えやすい、[2] 他者の言葉を受ける場合が多い、[3] 動詞が be または sound で、補語が right, nice, wonderful, enough, good, great, cool, perfect, bad, OK のような、話者の評価・反応を表す場合が多いのが特徴である。そうすると、中学段階でこの種の that を習得するとき、生徒はおそらく熟語のように全体をひとつのかたまりとして習得しているのではないだろうか。調査文で、bad 97%, nice 74%, enough 63%, wonderful 59%, OK 56% と、形容詞によって、that を選択した学生の率はかなりの差があるが、とにもかくにも、that を選んだ学生が一番多かったのは、that で始まる短文として習得されているためであろう。中学英語教科書でこの種の that として最初に出てくる That's right は調査しなかったが、もし入れておいたら、That's too bad の場合 (97%) と同じように、ほとんどの学生が that を選んだと思われる。なお、(23) の that は他人の発話の要素を受けてはいないが、この疑問文は自分への疑問文ではなくフレディへの疑問文である。すでに述べた事がらがフレディとの関係で捉えられており、話者自身との心理的密着性は this を使うほど強くはない。

上で見た特徴は that が主語位置の場合であるが、以下のような、that が目的語の位置に来ている場合も、これに似た特徴がある。つまり、文が短く (覚えやすい)、that は他者の発話を受け、動詞が know, believe 等で、言われたことにびっくりするという感情を伴っているのである。下記 (25) の調査文で that を選んだ学生が多かったのは、That's right などの例と同じく、全体をひとつのかたまりとして覚えているためであろう。

- (24) "How did the moais get to the beach?" I asked a man. He answered with a smile, "They walked." Do you believe that?
- (25) A: Japanese people invented soft tennis many years ago.
 B: I didn't know ().

(it 18% / that 69% / this 13%)

(26) A: Last Saturday I went to a forest near my house. I walked through it. I had a very good time.

B: That's good. You know, the National Trust in Japan protects that forest.

A: I didn't know that.

上ですでに触れたことであるが、中学英語教科書では動詞が sound (like) のときもこの種の that がよく出てくる。教科書の主たる内容が対話からなるコミュニケーション活動なので、これは当然である。なお、sound (like) では、that ではなく it で受けている例も少数見られる。断定の be と sound (like) との違いであろうが、補語の方も、beautifulなどは記述的で、評価の good などとは性質が違っている。it が出やすいのは、動詞が be のときと比べて感情表出の強さがそれほどでもないためではないだろうか。

(27) A: Shall we go swimming?

B: That sounds good. Where shall we go?

(28) A: I'd like to go to college to study math. I want to be computer engineer.

B: That sounds hard. I want to be a music teacher and teach small children.

(29) A: What do you want to see?

B: How about "Gandhi"?

A: Great. And then my father will cook us some curry.

B: That sounds nice.

(30) A: Tomorrow is Miki's birthday.

B: Oh, really? What will you give her?

A: I'll give her a concert ticket.

B: That sounds great.

(31) In Japan many parents used to lock their children outside the house for discipline. When I told that to my host father, he laughed and said, "That sounds like a real time-out! In America time-outs are usually inside."

(32) A: You use many languages in India. It sounds difficult.

B: It is a little.

(33) A: Yes. My country has great lakes, huge animal parks and Mt Kilimanjaro.

B: It sounds beautiful.

(34) A: Is it difficult?

B: No. Many people around the world make friends through computers.

A: It sounds like fun. H2 23

辞書によっては（中村・田辺（2001:that））、That's wonderful. に見られるような that の用法を、（（同意・反応・応答））の that として、That's why I love her. に見られるような、すでに述べたことを指す that の用法とは別項目にしているものもある。中学段階では、これに I didn't know that. に見られるような that の用法も一まとめにして、成句のように覚えさせて使わせるのが実際的なように思う。

5. おわりに

大学生が持っている英語の中間言語は、各自がこれまでの英語の学習から得た知識を基盤に構成されている。その中には母語の知識が紛れ込んだり、不完全な知識から作った誤った仮説もある。いずれかの段階で学習者自身が自分の中間言語と目標言語（英語）との認知比較によって誤りに気付き、仮説の修正に至ることが出来ればいいが、実際にはそのような時間的余裕もないので、教師が誤りに気付かせて仮説の訂正をさせる、あるいは中間言語に新たな仮説を付加させるなど、かなりの指導を行わなければならない。できれば、仮説の修正や付加はなるべく少なくしたい。そのためには、小学生、中学生、高校生、大学生が持っている英語中間言語に関する情報をお互いに共有することが必要である。本稿はそのための大学側からの情報として理解していただければ幸いである。

注

1. 子ども言語（英語）習得における代名詞については、Tomassello（2003）の第6章等を参照のこと。
2. 英語母語話者でも代名詞（it, that, this）の選択が異なることについては、Niimura & Hayashi（2008）を参照のこと。
3. 八木（2004）も that のところで、＜問いに対して答える場合は “What's that?” “It's an airplane.” のように that を it で受けるのが普通。しかし飛行機を見ながら答える場合は、答える側も飛行機をさして that を使い、 “That's an airplane.” とすることも可。＞と注記している（一部省略）。
4. 後述のように、話者領域の中に他者領域が入り込むこともある。
5. 例は Swan（1995: 585）を参照のこと。
6. Swan（1995: 595）は、この三者間の違いは “not well understood” と述べているが、第三版の Swan（2005）では、スペースの省略のためかこの記述は省かれている。Huddleston & Pullum（2002: 1506）は、that, this について、“…in general one could be replaced by the other with very little effect on the meaning.” と述べている。Parrott（2000: 321）も両者は “often inter-

changeable”としている（どちらも使える例：We've had a few unexpected problems. This/That is why I've called another meeting.）。

引用文献

- 浅野博（監修）（2008）⁶『ニューホライズン英和辞典』東京書籍
- 安藤貞雄・山田政美（1995）『現代英米語用法辞典』研究社
- Biber, D. et al. (1999) *Longman Grammar of Spoken and Written English*, Longman.
- Carter, R. & M. McCarthy (2006) *Cambridge Grammar of English*, Cambridge University Press
- Huddleston, R. & G. K. Pullum (2002) *The Cambridge Grammar of the English Language*, Cambridge University Press.
- Lakoff, R. (1974) “Remarks on This and That,” *Papers from the tenth regional meeting, Chicago Linguistic Society*.
- Lyons, J. (1977) *Semantics Vol. 2*, Cambridge University Press.
- 村田勇三郎（1982）『機能英文法』大修館書店
- 中村匡克・田辺洋二編（2001）『ワールドバル英和辞典』小学館
- Niimura, T. & B. Hayashi (2008) “This, that and it from a cognitive perspective,” 日本認知言語学会『日本認知言語学会論文集』第8巻
- Parrott, M. (2000) *Grammar for English Language Teachers*, Cambridge University Press.
- 下薫・三省堂編集所編（2003）『キッズクラウン英和辞典』三省堂
- Strauss, S. (2002) “This, that, and it in spoken American English: a demonstrative system of gradient focus,” *Language Sciences* 24 (2).
- Swan, M. (1995, 2005) *Practical English Usage*, Oxford University Press.
- 田中茂範・武田修一・川出才紀編（2005）『Eゲイト英和辞典』ベネッセコーポレーション
- Tanz, C. (1980) *Studies in the Acquisition of Deictic Terms*, Cambridge University Press.
- Tomasello, M. (2003) *Constructing a Language: a Usage-Based Theory of Language Acquisition*, Harvard University Press.
- 八木克正（編集主幹）（2004）『ユース プログレッシブ英和辞典』小学館

中学校英語教科書

- 高橋貞雄他（2008）³ *New Crown 1, 2, 3* 三省堂
- 笠島準一他（2006） *New Horizon 1, 2, 3* 東京書籍
- 佐野正之他（2008）³ *Sunshine 1, 2, 3* 開隆堂